

論文

学生が主体的に取り組む「子育て支援活動」1
—実践を通して捉える子育て支援の意義—菊地 篤子 豊田 明子 荻原はるみ
村田 康常 豊田 和子

I. はじめに

1. 保育者養成校における子育て支援活動

保育所保育指針(平成29年告示)第4章「子育て支援」には、「全ての子どもの健やかな育ちを実現することができるよう、(中略)子どもの育ちを家庭と連携して支援していくとともに、保護者及び地域が有する子育てを自ら実践する力の向上に資するよう」留意することが示されている。また、子育て支援に関する保育者の職務には、保育所を利用している保護者に対する子育て支援とともに、地域の保護者等に対する子育て支援が定められている。これは、保育者養成課程にも反映され、教科目「子育て支援」で、保育者を目指す学生にその知識・技能の習得が求められている。一方で、子育て支援の実践については特に必修化されておらず、各保育者養成校の工夫や独自の取り組みに任されているのが実状である。保育者養成校での子育て支援活動に学生が参加し、体験学習を重ねる取り組みに関する報告では、これまでいくつかの課題が挙げられている。竹之下ら¹⁾は、保護者支援能力の向上のための課題として、学生の乳児保育の経験不足や、親支援として母親との交流機会がないことを、實川・砂上²⁾は、学生が抱える困難さとして、子育て支援と実際の子育て支援とのギャップがある一方で、子育てや子育て支援にかかわる経験も少なく、具体的手立てが見いだせていないことを挙げている。教育実習や保育実習でも保護者と直接かかわる機会はほとんどなく、各実習ではこれらの課題の解消にはつながりにくいといえる。

一方、子育て支援活動の実践とは、子育て中の親子が参加する活動なので、地域の子育て家庭の協力が不可欠である。特に養成校が主体となって運営する活動の場合は、養成校そのものや子育て支援活動の内容に、信頼性や魅力を伴わないと、親子は積極的に集わないことが推測される。また、田岡³⁾は保育士養成校における子育て支援活動の意義について「地域社会と一丸となり、将来地域社会に貢献し得る保育者の養成」であると報告している。つまり、保育者養成校での子育て支援活動は、地域に根付き子育て家庭の理解を得たうえで、養成校としても子育て支援の一端を担っていることを念頭に置いた実践活動で、かつ、その内容に一定の質が求められているといえる。

2. 保育者養成校としての地域活動

保育者養成校による地域の保護者等に対する子育て支援は、大学等の高等教育機関が取り組んでいる地域活動の一つである。本学院も所在地域の子育て支援の一端を担う活動を行ってきた。以下に概要を紹介する。

本学院がこれまで実施してきた子育て支援の取組は大きく3種類に分けることができる。それらは、①2011年度から区の生涯学習センターと共に実施してきた親学関連講座、②2017年度に開始

した子育て支援「りゅうじょう広場」の活動、そして③それらがスタートする前から本学院のゼミ活動の一環として実施されてきた支援活動の3つである。

①の親学関連講座は、1歳児の保護者の子育てに関する学びを支え、保護者間の交流を図ることを目的とする活動であり、本学の多様な専門性をもつ教員が講師となってオムニバス形式で企画され、学生も保育補助として積極的に関与している。

②の「りゅうじょう広場」では、地域の0-1歳児と保護者が自由に遊ぶ時間を大切にされた各種活動を企画している。この「りゅうじょう広場」で実施してきた活動は、地域の子育て世帯の信頼と期待に支えられて、活動日・時間を増やしてほしい、対象年齢を広げてほしいという要望を受け止めながら展開してきたが、2020年の年明けからの約2年間は、新型コロナウイルス感染症の流行にともない、全ての活動を停止することとなった。

③のゼミ活動は、本学院短期大学保育科の2年次のゼミナール（「総合演習」、2015年度より「教職実践演習」）において実施されている子育て支援活動であり、Hゼミの「たんぽぽクラブ」（2008年から現在まで継続）やMゼミの「ぐるんぱえほんのつどい」（2009年から2019年まで開催、2020年度以降は休止中）がある（長谷中，2017. Murata, 2021）。

以上のような、これまでに蓄積された様々な取り組みにより、本学院は地域からの保育や子育てに関する一定の信頼を得ながら、地域子育て支援をするとともに、学生の学びの場としての支援活動の場を用意することができている。

3. 専門演習・研究科目の「子ども学フィールドワーク」

本学こども学部においては、専門演習・研究科目として「子ども学フィールドワーク」が設けられている。「子どもを学ぶ、子どもに学ぶ、ともに学ぶ」という「学びの循環」を通して、「反省的思考の習慣」を身につけることをめざした4年間のプログラムである。科目としては、1年次から3年次開講科目の「子ども学フィールドワークⅠ・Ⅱ・Ⅲ」と4年次開講科目の「子ども学研究ゼミナール」である。子ども学フィールドワークについては、既に野田ら⁴⁾により報告されているため、ここでは、その趣旨から逸脱しないために、同論文に記載されている内容を抜粋して記載する。

まず1年次で学ぶ「子ども学フィールドワークⅠ」では、「反省的思考の習慣」を身につけるための第1ステージとして、子どもに出会い子どもの側に身を置き、幼稚園での観察とその内容について振り返ることが学習の中心とされている。実際に幼稚園へ出かけ、観察を通じて「子どもを学び」、観察記録を基に仲間と討論することにより振り返ることを通じて「子どもに学び」、発表・討議を通して、仲間とのコミュニケーション力をつけ「ともに学んでいく」。

2年次で学ぶ「子ども学フィールドワークⅡ」では、第2ステージとして、子どもの行為と表現の関わりを理解すること、保育所で子どもと関わる実践、その振り返りを中心に学習が進んでいく。学びの循環は、前期・後期に1回ずつ計2回行われ行為の後で振り返り記録することとされている。前期では、「子どもを学ぶ」は、「子どもの行為」や「表現」についての学習をすること、「子どもに学ぶ」は、保育所における4回の実践において、子どもの行為を観察し子どもの表現を読み取り子どもと交わること、「ともに学ぶ」は、子どもと交わるという行為の中で瞬時に読み取っていた「子どもの行為と表現のかかわり」を、行為の後で振り返り記

録をすることとされている。そして後期では、子どもの表現とかかわりについて考察するために子どもの表現について学習し、保育実践の事例(教材)を用いて、子どもの行為と表現のかかわりを4つのテーマそれぞれの観点から学習が進められる。前期に実施した4回の各自の実践のうち1つを分析の視点として振り返り、仲間と討議することを通じて、学習したことをプレゼンテーションする力、仲間の発表を聴く力が養われていく。

そして「反省的思考の習慣」を身につけるための第3ステージである「子ども学フィールドⅢ」へと続いていく。「子ども学フィールドワークⅢ」では、保育実践のプロセス(計画し、実践し、課題を発見し、次の実践において改善を試みる)を理解することを目的とし、今までの学びをもとに、子育て支援の場での保育実践を行う。

フィールドワークでは、「子どもを学ぶ、子どもに学ぶ、ともに学ぶ」それぞれが、全学年での学びの上に、次の学習が、高次のものとして積み重なるように設定され、体系的な学びとなるよう構成されている。またこれらの科目は、各年次に開講されている他の専門科目との関連性も考慮されている。2020年度、2021年度はコロナ禍であったため、これらのプログラムを全て実施することは不可能であったが、可能な範囲で臨機応変に授業が展開されてきた。

4. 初年度学生が実践する子育て支援活動の配慮事項

「子ども学フィールドワークⅢ」科目を履修する学生は、これまで「子ども学フィールドワークⅠ・Ⅱ」でそれぞれ幼稚園、保育所での体験学習、また「教育実習Ⅰ」「保育実習Ⅰ(保育所)」で実習を経験してきている。これらの機会における学びの中核は、主として園での保育者の役割についてであり、保護者が子どもの傍らにいない園生活における子ども理解とその援助に関することである。

「子ども学フィールドワークⅢ」は前述の通り、子育て支援に関する学びを深める科目で、実践活動の対象は保護者と子どもである。「子ども学フィールドワークⅠ・Ⅱ」での体験学習では朝夕の送迎時を避けて園に赴いているので、保護者や親子の様子を見る機会はほとんどないため、学生が初めて保護者と直接接する初めての機会である。そのことへの緊張感に加え、子育て支援活動を学年全体で運営することに対する不安感を持つことが予想される。さらに、本科目は開学3年目で初めて開講されることと、これまで継続してきた学内施設を開放して行ってきた子育て支援事業が、コロナ禍で長期休業を余儀なくされ、本学院が参与する様々な子育て支援活動を見たことがないという実情があったため、大まかな時間の流れや基本的な環境構成、手順など、おおよその枠組みは教員が用意し、学生らが子育て支援の実践内容そのものに着目できるように配慮する。

また、子育て支援活動の実践内容の質の向上と学びの深化、特に子育て中の親子と直接触れることで支援の在り方を考え、学生自身が課題を見出すことが期待される。そのためには、省察による反省的思考を繰り返しながら複数回実践学習することで、その機会を得るように配慮する。田岡(前出)は「経験学習の形態をとることからプロセス指向の観点を意識すること」の重要性を示しており、複数回の実践学習を重ねるプロセスで得られる学びを学生自身が意識するよう促す。

Ⅱ. 目的

本研究では、学生が主体となり大学内で開催する子育て支援活動の実践を通して、学生の子育て

支援に関する理解の深化がどのように図られたかを検証することを目的とする。また、カリキュラム化された「子育て支援活動」の独自の教育的意義や課題を明らかにし、保育者養成校で学生が運営・実施する子育て支援活動の質の向上に資する。

研究の倫理的配慮として、本稿でのデータ使用に関して学生には個人情報保護の遵守を約束し、大学の研究倫理委員会の承諾を得ている。

Ⅲ. 方法

1. 実践および分析方法

通年科目「子ども学フィールドワークⅢ」のうち、前期に「子育て支援活動『りゅうじょうであそぼ』」に関する授業を実施し、その内容について、学生の省察をもとに分析する。計4回の子育て支援活動の実践と、その事前・事後活動を授業内容として組み込む。表1に「子ども学フィールドワークⅢ」前期授業計画を示す。

学生は、子育て支援活動の計画・実践・振り返り・改善の記録を毎回記し、学生自身が自分の活動を省察する。すべての実践活動終了後、学生に事前・事後の省察活動の有効性についてアンケート調査する。また、子育て支援活動実践全体に関する省察レポートの記述内容を集計、分析し、学生の子育て支援活動に関する理解と課題を精査する。さらに、学内で授業として展開する学生主体の子育て支援活動を、継続的に実施していくための配慮点や課題を検証する。

表1 「子ども学フィールドワークⅢ」前期授業計画

週	回	内 容
1	1	ガイダンス 授業のねらい・グループ分け
	2	キッズルーム・体育館の環境（設備・玩具等）を知る
2	3	環境構成演習（目的・活動計画に沿って環境設定をする）
	4	実践1の準備（グループごと）
3	5	実践1
	6	
4	7	実践1の振り返り・グループ討議
	8	実践2・3の準備
5	9	実践2
	10	
6	11	実践3
	12	
7	13	実践2・3の振り返り・グループ討議
	14	実践4の準備
8	15	実践4
	16	
9	17	実践4の振り返り
	18	成果発表の準備
10	19	成果発表・前期の振り返りとまとめ
	20	後期ガイダンス

2. 子育て支援活動「りゅうじょうであそぼ」について

子育て支援活動「りゅうじょうであそぼ」（以下子育て支援活動とする）は、地域の2歳児以下の子どもと保護者が本学体育館で自由に遊び、他の参加者との交流を図れるような環境を提供する「ひろば型」の子育て支援活動である。

前年度の前期までは、2. で記述した本学院の支援活動の実績を継承してキッズルームでの実施を検討していたが、感染症対策のために体育館での実施に切り替えて計画を練り直すこととした。参加者間や参加者と学生の間に密な状況が長時間生まれぬよう慎重を期すため、対象年齢を比較的動きがゆっくりの1歳児までとし、受け入れ組数を12組とした。ただし初回で参加者や学生の様子を把握でき、問題なくオペレーションが可能であることが予想できたため、2回目以降は2歳児まで18組を受け入れることに変更した。

実施期間は4月下旬から5月末までである。実施回数は、オリエンテーションとグループ分け、環境構成演習の授業後に1回、初回の振り返りと次回の準備時間を挟んで2回、前2回の振り返りをふまえて準備を重ねて1回（この3回は5月に実施）の計4回である。

学生主体かつ参加者主体の両方の条件を満たすために、学生は参加者の動きを予想して環境構成をし、参加者は学生が準備した環境からメッセージを受け取って自由に行動するという状態が生まれることを目指し、学生の役割は、一斉におこなう活動の提供というよりも、環境構成を主眼とすることにした。既述のように、学生は本学院の実施してきた子育て支援活動を目にする機会もなく、人と交流する活動を制限された2年間を過ごしてきたため、子育て活動の枠組みは教員側で準備した（資料1）。その「枠」は環境構成（コーナー設定）の柱となる「子ども・保護者の動き」である。

設定したコーナーは、「粗大な動き」を1つ、「微細な動き」を2つ、「ふれあい遊び」のスペースを2種類（ゆったり／アクティブに過ごす場所）の計5つである。「粗大な動き」では体を大きく使って遊ぶこと（領域・健康）、「微細な動き」では音・色・形に着目できる環境や絵本や紙芝居に触れること（領域・言葉、環境、表現）、「ふれあい遊び」では保護者と一緒にスキンシップを楽しむこと（領域・人間関係）を念頭においている。

学籍番号でグループ分けをされた学生たちは、グループで担当するコーナーを選び、それぞれのコーナーの設定意図の範囲内で自由に活動内容を考えて、取り組んでみたい活動にチャレンジした。つまり学生は、教員や専門の支援スタッフの補助ではなく、各コーナーの企画と実践の責任者ということになる。

なお、教員の役割は「見守り」と「傾聴」、「学生の求めに応じて助言をすること」である。参加者の安全性が危ぶまれるのではない限り、学生が「やってみて気づき、気づいて変わる」ことができるよう、指導的誘導的な関わりを注意深く避けるよう尽力した。

3. 省察に関する活動について

（1）PDCAシートによる毎回の省察

毎回PDCAシート（資料2）を用い、自分自身とグループ活動の省察を行う。この作業をするにあたり、個々の学生のメモ書きによる記録の他、予めグループごとに定点設置し撮影した動画記録を用いる。PDCAシートの項目は、学生個人に関する事項・グループ活動に関する事項の他、自分以外の学生へ目を向けることを目的として「印象に残った学生」を推薦する項目を設ける。記

録の仕方は、メモ・箇条書き・文章・イラストなど、個々の学生の自由とする。

(2) 子育て支援活動全体の省察

全実践を通した子育て支援活動全体に関する省察について、Google フォームへの記入方式で計2回実施し、分析する。省察の内容は表2のとおりである。

なお、学生には本実践学習に関する提出課題は本研究の研究対象とすることについて口頭並びに文書で説明し、同意を得ている。

表2 子育て支援活動全体に関する省察の項目

	省察時期	内容
1回目	実践3終了後	実践1で意識して活動したこと
		実践2・3で意識して活動したこと
		実践1～3を通して、自分が実践できたと思ったこと
2回目	実践4終了後	実践4で意識して活動したこと
		実践1～4を通して、自分が実感できたと思ったこと
		生かすことができた科目、もっと生かすべきだったと思う科目
		今後深めたい学びや課題
		下級生に伝えたいこと
その他(気づき、感想、意見など) ※分析項目外		

IV. 結果および考察

2022年度は33名の学生が「子ども学フィールドワークⅢ」を履修し、子育て支援活動「りゅうじょううであそぼ」に参加した。うち、資料を得られたものについて分析、考察した。

1. PDCA シートの活用

全4回終了後、学生にとってPDCAシートの活用が有意義だったか否かのアンケートを取った(表3)。

毎回の準備～実践～振り返り～改善について、約82%の学生がPDCAシートを有効に活用したと感じていることがわかった。

表3 PDCAシート感想

項目	人
とても有効だった	11
有効だった	16
あまり効果がなかった	3
全く効果がなかった	1
回答無し	2

n=33

2. 子育て支援活動に関する省察

全4回の子育て支援活動全体に関する省察について、省察レポートから以下のような結果を得た。

(1) 「意識して活動したこと」の自己評価

実践1、実践2・3(共通)、実践4の計3回、毎回11項目について8段階で自分が「意識して活動したこと」に関する自己評価した。その全体平均を示す(表4、図1)。なお、①～⑪の項目は、教員がこれらの内容について学びを深めてほしいと願った、実践の目標を整理した項目である。

第1回の自己評価が最も低く、その後は全体的に自己評価が上がったことが分かった。第2・3回と第4回の自己評価は大きな違いがみられなかった。①や②の物的環境に関する事項や、③の自分自身の立ち居振る舞い、⑧子どもの興味については、第1回から自己評価は高く、回を追うことにそれらは一層高評価になっている。一方、第1回で特に意識が向いておらず自己評価が低かったのは、⑥時間に関する配慮、⑤保護者との関係性、⑪参加者間関係性への配慮についてであった。

回を追うごとに自己評価は高くなったが、他の項目に比べると低かった。また、⑦時間（時間や状況に応じた環境の再構成）で柔軟に対応することについては全回通じて他の項目に比べ評価が低く、達成できなかったという傾向が強かった。

表4 子育て支援活動の実践項目及び自己評価平均

	自己評価学年平均 (8段階評価)		
	第1回	第2・3回	第4回
①物(遊具、玩具、絵本、マット等)の質・量	6	6.97	6.94
②物の配置、色、サイズ	6.27	7.03	6.77
③自分のふるまい(表情、言葉、位置、動き)	6.18	6.79	6.74
④自分と仲間の関係	6	6.55	6.7
⑤自分と保護者の関係	4.82	6.03	5.97
⑥時間(時間や状況に応じた環境の再構成)	4.45	5.76	5.87
⑦子どもの発達(と遊びの関係)	5.61	6.48	6.48
⑧子どもの興味(と遊びの関係)	6.18	6.94	6.97
⑨保護者にとっての居心地のよさ	5.15	6	6.13
⑩保護者と子どもの関係	5.76	6.7	6.61
⑪参加者間の関係(保護者間、保護者と他の子ども、子ども間)	4.94	6.03	6.23

n=33

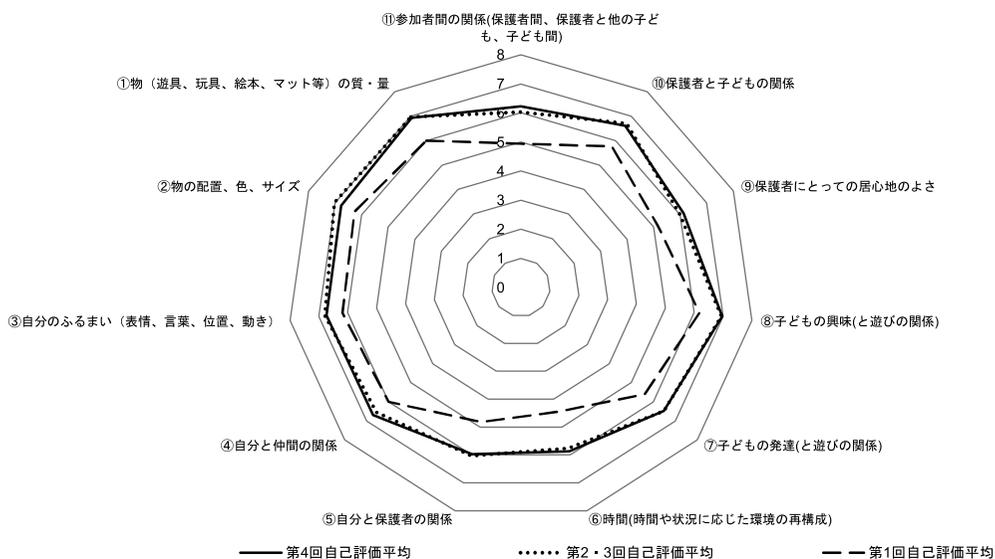


図1 子育て支援活動の実践項目に関する8段階での自己評価 (学年平均)

(2) 学生が実践できたと捉えた子育て支援の活動

学生が実践できたと考えた活動について、項目を設定し選択回答を得た(複数回答可)。選択項目は、実践者が活動中に心掛けるべき事項として、①場の提供、②遊びの提供、③共に遊ぶ(遊び相手)、④見守り、⑤保護者とのやり取り(話し相手)、⑥子どもの遊びや生活の助言、⑦保護者同士をつなげる、⑧情報提供、の8項目で、第3回終了時と第4回終了時の2回実施した。(図2)。

実践できたと考える項目の上位4項目は2回とも「①場の提供」「②遊びの提供」「③共に遊ぶこと」

学生が主体的に取り組む「子育て支援活動」1

「④見守り」だった。第1回～3回までの回答に比べ第4回終了時に増加したのは「①場の提供」「②遊びの提供」「⑤保護者とのやり取り」「⑦保護者同士をつなげる」「⑧情報提供」であった。特に「保護者とのやり取り」に関して意識を向け実践した学生が増えたことがわかった。

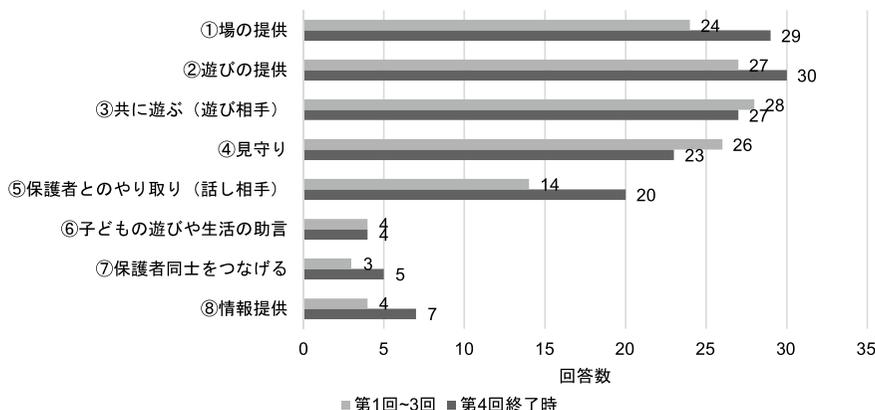


図2 学生が実践できたと感じた子育て支援活動(複数回答)

表5 これまでの学びで生かすことができたと思う科目・もっと生かすべきだったと思う科目(複数回答)

科目名	※1	※2	科目名	※1	※2	科目名	※1	※2
子ども学フィールドワークⅡ	22	7	子どもの健康と安全	9	5	子どもの造形表現	2	5
子ども学フィールドワークⅠ	21	6	子どもの音楽表現ⅠまたはⅡ	9	6	心理と人間	2	2
幼児と環境	20	5	保育内容指導法 言葉	8	5	保育内容指導法 健康	2	2
教育実習指導Ⅰおよび教育実習Ⅰ	20	2	スポーツとレクリエーション実技ⅠまたはⅡ	7	7	キリスト教概論	1	0
乳児保育ⅠまたはⅡ	19	8	保育内容指導法 表現	7	6	倫理と人間	1	1
子育て支援	19	15	保育内容指導法 人偏関係	7	5	社会的養護ⅠまたはⅡ	1	1
幼児と表現	16	8	保育原理	6	5	多文化共生	1	2
幼児と人間関係	16	8	子ども家庭福祉ⅠまたはⅡ	6	5	特別支援教育Ⅰ	1	1
幼児と言葉	14	7	保育者論	5	5	多文化共生教育	1	2
発達心理学	13	11	スポーツと健康	4	4	保育内容指導法 総論	0	2
保育実習指導Ⅰ(保育所)及び保育実習Ⅰ(保育所)	13	2	保育実習指導Ⅰ(施設)及び保育実習Ⅰ(施設)	4	1	英語基礎ⅠまたはⅡ	0	1
子どもの音楽基礎	12	4	教育心理学	3	5	情報基礎ⅠまたはⅡ	0	1
子どもの身体表現	12	4	子どもの保健	3	3	調査・統計法ⅠまたはⅡ	0	1
幼児と健康	11	4	現代子ども学	2	2	教育課程論	0	1
保育内容指導法 環境	11	7	社会福祉	2	2	日本国憲法Ⅰ	0	0
保育技術演習	11	6	生命と人間	2	1	異文化理解	0	3
子ども家庭支援論	11	5	福祉と人間	2	1	障がい児者援助技術	0	1
幼児理解と教育相談	9	7	教育原理	2	2	論文作成とプレゼンテーション	0	1
子ども家庭支援の心理学	9	9	子どもの造形基礎	2	5	英語またはポルトガル語または韓国語または中国語基礎Ⅰ	0	0

※1 これまでの学びで生かすことができたと思う科目

※2 これまでの学びでもっと生かすべきだったと思う科目

（3）これまで学んだ教科目に関する振り返り

計4回の子育て支援活動を通して、大学で1年次から開講されている全ての教科目の中で学生が「生かすことができたと思う科目」と「もっと生かすべきだったと思う科目」を選択し、回答を得た（複数回答可、上限なし）（表5）。

「生かすことができたと思う科目」で最も多いのは「子ども学フィールドワークⅠ・Ⅱ」だった。また、実習および実習指導については教育実習のほうが、保育実習よりも生かすことができたという回答が多かった。また、5領域に関係する科目や、子育て支援活動に参加する対象児年齢に関する「乳児保育」、子育てや家庭に関する科目である「子育て支援」「子ども家庭支援」、子どもの発達理解に関する「発達心理学」が多くの回答を得た。

「もっと生かすべきだったと思う科目」で最も多かったのは「子育て支援」で、続いて「発達心理学」「子ども家庭支援の心理学」だった。「子育て支援」「発達心理学」は、「生かすことができたと思う」「もっと生かすべきだったと思う」の両方で回答数が多く、子育て支援に関する基礎知識の必要性や子どもの発達を理解したうえで子育て支援に取り組むことの大切さを実感した学生が多いことがわかった。

（4）今後に向けた課題

①学生が捉えた自己課題

今後の子育て支援活動に向けて深めたい学びや課題について回答を得た。文章記述によって得た内容を「子育て支援活動運営に関すること」「保護者支援に関すること」「子育て支援活動に関すること」「知識や技能の向上に関すること」の4つに分類し、内容を整理、集計した（表6）。なお、文章記述であるため、一人で複数の課題を挙げた学生もいた。

子育て支援活動の運営に関する記述は計14件あった。特に環境づくりに関して課題を持った学生が最も多かった。保護者支援に関する記述は計13件あり、保護者とのコミュニケーションに関して課題を持った学生が多かった。子育て支援活動に関する記述は計4件あった。知識や技能の向上に関する記述は全体の中で最も多く計23件あった。特に子育て支援のニーズに関する記述が最も多かった。

表6 自分が深めたい学びや課題（文章記述より内容を分析）

	内容	回答数(人)
子育て支援活動運営に関すること	環境づくり（配置・空間設定など）	8
	タイムテーブル	1
	安全面への配慮（場・玩具等）	3
	人的環境（学生の役割など）	2
保護者支援に関すること	保護者とのコミュニケーション	10
	保護者支援の在り方・方法	3
子育て支援活動に関すること	他の様々な子育て支援の実際	3
	子育て全般に関する情報	1
知識や技能の向上に関すること	親子遊び	1
	絵本	2
	子どもの発達	5
	子育て支援のニーズ	12
	子ども・子育てに関する知識全般	3

n=33

②次年度に向けた課題

次年度の子育て支援活動に向けた課題を検討するため、下級生に伝えたいと思った事項について質問し、回答を得た。文章記述により得た内容を「子育て支援活動を実践するまでにすべきこと」「子育て支援活動実践の事前・事後」「子育て支援活動実践中」という3つの時期に区分して整理した(表7)。なお、文章記述であるため、一人で複数の課題を挙げた学生もいた。

「子育て支援活動を実践するまでにすべきこと」に関する記述は計7件あった。特に発達に関する学びを復習し理解を深めることに関する内容が多かった。「子育て支援活動実践の事前・事後」に関する記述は計11件あった。学年全体で取り組んだ活動だったため、チームワークの重要性を感じ、学生間で話し合いなどコミュニケーションを取る努力が必要、という意見が多かった。また、PDCAの循環、や企画や準備の大切さを挙げた記述もあり、実践前後の取り組みに着目していることが分かった。「子育て支援活動実践中」に関する記述が最も多く、計34件の記述があった。実践への積極性や学生の態度等、実習と類似した事項に関する記述が多い中、保護者とのコミュニケーションや親子の様子を観察することなどの記述もあり、子育て支援活動の特性に関する意見も多く挙げられた。

表7 下級生に伝えたいこと(文書記述より内容を分析)

	回答数(人)
子育て支援活動を実践するまでにすべきこと	
子どもの発達を復習し理解を深める	5
子育て支援に関する理解を深める	1
子育て・子育て支援に関する資源などの知識を持つ	1
子育て支援活動実践の事前・事後	
クラス全体のまとめり・チームワークを持つための話し合いをする	6
PDCAを繰り返すこと	2
試行錯誤すること	1
適切な企画を考える	1
準備の大切さ	1
子育て支援活動実践中	
保護者とのコミュニケーション力	9
積極性の大切さ	9
臨機応変に動くこと	5
笑顔や挨拶など、態度の大切さ	4
安全配慮の大切さ	2
親子の様子を観察し支援に生かす	2
実習の経験を活かす	1
仲間や教員を観察し学ぶ	1
支援活動の楽しさ	1

n=33

3. 考察

(1) 学生による子育て支援活動の自己評価

学生は、実践に関する省察の際、教員が設定した項目について自己評価を行った。「意識して活動した」11項目は、教員が設定した学びの目標でもある。また、学生が「実践できたと捉えた」8項目は、

当日の子育て支援活動実践を振り返る際に、着目してほしいと教員が願った項目であると同時に、次回の実践時の課題にすべき項目となるものである。いずれの場合も、玩具や遊具の配置、フロアマットのレイアウト等の環境構成、中でも自分たちが提供するコーナー活動の設定に強く着目し、自己評価も高いことがわかった。続けて、子どもとの遊びや関わり方に着目しやすく、自己評価も高かった。反対に、保護者と直接関わることに関する項目と、時間や環境への柔軟な対応に関する自己評価は他の項目と比べ低かった。これは、これまでの実習で培われた、子どもの遊びに関する設定活動を主とした園での保育活動からの系譜ということができる一方、子育て支援活動との違いに関する理解が不十分であること、子育て支援そのものの理解が不十分であることが推察された。

また、教員は、学生に対し自己評価の項目事項すべてについて着目し、実践・省察の中で学びを深め、次回の実践に生かしてほしいという願いを持ち、実践3終了時にこれらの項目を授業内で提示した。しかし、実践3後と実践4後で大きな数値の変化もなかった。教員は改善の余地があると思なしていたが、学生は、実践3までにある程度達成できたと感じていたのではないかと考えられ、今後は、実践目標や課題などについてよりきめ細かく提示する必要があると考察した。

(2) 学生が捉えた課題

学生が主体となり実践した子育て支援活動では、保育に関する有資格の支援スタッフの補助ではないため、実践中にモデルとなるスタッフの模倣をする機会がなかった。これは学生にとっては大変困難なチャレンジだったかもしれないが、多くのことへの気づきの機会となったことがわかった。

まず、子育て支援活動の運営に関する課題意識は多くの学生が持ったことがわかった。子どもとの関係性に加え、保護者との関係性を築くことや、運営するためにはチームワーク力、そして学生同士のコミュニケーション力の必要性が挙げられた。この気づきは、保育の協働性への学びにつながることを期待される。

次に、子育て支援活動に携わるためには、支援ニーズの理解や、自身の保育技能や保育・子どもの発達等に関する知識など、保育専門職としてのスキルアップの必要性が多く挙げられた。保護者と関わる際に求められる保育専門職としての責任への気づきになったと思われる。これまで大学で履修してきた教科目一覧を見ることだけでも振り返ることができたという学生もおり、復習することの大切さへの気づきとなった様子もみられた。

(3) 授業展開について

今回の子育て支援活動は「子ども学フィールドワークⅠ・Ⅱ」から積み上げられた活動であるとともに、実習を経験した後のタイミングで実施されたため、子どもと関わった経験や、遊びを企画・実践した経験を生かすことができた、という成果があった。保育現場での学びを実践前に再確認することで、円滑な実践につながると示唆された。一方で、子どもと関わることはある程度自信を持っている一方、保護者との関係づくりについては戸惑う学生がほとんどだったため、事前準備の段階から丁寧に支援していく必要があると考察した。

今後の授業展開について検討する際、今回得た「下級生へ伝えたいこと」の記述と分析を参考にしたい。これはすなわち、「子ども学フィールドワークⅢ」の実践に至る前に知っておくべき、と学生が思ったことなので、次年度の授業に生かすべき貴重な資料となった。中でも「積極性」については、その具体的内容は様々で、保護者に対するもの、子どもに対するものの他に、学生間でのやりとりや、実践中の臨機応変さに関しても挙げられており、次年度以降の指導の中でも着目したい。

V. まとめ

本研究では「子ども学フィールドワークⅢ」前期授業での取り組みを通じ、保育者養成校で実施する学生主体の子育て支援活動の成果と課題を検討した。

毎回の実践で「準備・実践・振り返り・改善」を繰り返すことが、学生自らの実践活動に有意義であることを実感できたという点や、学生自身がある程度達成感を持ちながらも様々な課題を見出すことができたという点から、1年次からの学びの成果であり、反省的思考の習慣が身についているといえる。ただし、反省的思考のための着目点の精査が必要であると考察した。「子ども学フィールドワークⅢ」で実践する子育て支援活動が、単なる「親子が遊びにくる場の提供」や「子どもが遊べる機会の提供」ではなく、子育て支援の意義や地域の子育て家庭、子育て支援の実態などを事前に全員で確認したうえでの実践活動とすることが大切である。これまでの学びの何を生かすのか、留意すべきことは何なのか、自分たちの実践では何を目標とするかなど、教科目「子育て支援」と連携しながら、授業内でより明確に提示し、省察もタイミングを逃さず実施できるように授業構成を再検討したい。

また、今回の調査で、保育者の協働性について体験学習できる貴重な機会になり得ることもわかった。保育所保育指針第5章「職員の資質向上」1 職員の資質向上に関する基本的事項(2) 保育の質の向上に向けた組織的な取組に関して、保育所保育指針解説には「職員一人一人が保育所全体としての目標を共有しながら協働する一つのチームとなって保育に当たるとともに、その質の向上を図っていくためには、他の保育士等への助言や指導を行い…(後略)」と記されている⁵⁾。学生は、お互いに意見を出し合ったり活動を調整しあったりすることに躊躇する傾向が強く「学生間でのコミュニケーションが難しかった」という感想も少なからずあった。保育は一人で行うものではなく協働性が必要で、この点も実践目標として定め、配慮事項としたい。

さらに、保護者との関わり方や留意点についても、丁寧に学びながら実践する必要性が高いことも明らかになった。この点については、参加親子の力を借りながら実践することが貴重な体験学習でもある。本学院は、これまでに培った地域子育て支援活動の信頼と実績があるため、コロナ禍による空白があっても参加希望親子が多く集まった。さらに、今回の全4回の実践でもリピーターが多かったことから、本学院の子育て支援活動を利用したいというニーズがあることは明らかである。今後の課題として、学生が保護者との関わりを持ちやすくなるような方法を検討する必要がある。たとえば、参加者へのインタビューやアンケート調査などを通して、保護者が持つ支援ニーズをとらえ、実践中のコミュニケーションに活用できるように工夫する方法がある。狩野は子育て支援広場について、地域親子の交流と遊び場の更なる熟成を支えるために保護者の視点を「広場」運営に活かすことが可能であり、必要であると考えられる、としている⁶⁾。「子ども学フィールドワークⅢ」の授業内で実践・展開しているこの子育て支援活動の質の向上、そして継続のために、地域の子育て家庭と共存し、ともに育つ姿勢を持って今後を生かしたいと考える。

最後に、本稿は、保育者養成校が地域社会に根差す貢献的活動の蓄積を背景に、カリキュラム化された学修における「学生主体の子育て支援活動」という実践的学びに関する研究の第一報である。さらに継続して、“学生の学びから学ぶ”という視点をもって保育者養成教育における「子育て支援活動」の意義と課題を探求し精査していくことが求められる。

引用文献

- 1) 竹之下典祥・馬見塚珠生「学生の地域子育て支援ひろば実習から得られた保育士養成の課題」盛岡大学紀要第33号 pp.43-52、2016
- 2) 實川慎子・砂上史子「保育者養成課程の地域子育て支援実習における学生の困難感：学生の保護者理解と保護者へのかかわりに注目して」千葉大学教育学部研究紀要第65号 pp.327-334、2017
- 3) 田岡紀美子「短期大学を拠点とした学生主体の子育て支援活動の意義—ぶんぶんひろばでのサービスラーニングに着目して—」滋賀文教短期大学紀要第24号 pp.93-112、2022
- 4) 野田さとみ、鬘櫛久美子『「成長し続ける保育者」を要請するプログラム（2）—4年間の学びを支えるプログラム—』名古屋柳城女子大学研究紀要創刊号 pp.63-70、2020
- 5) 厚生労働省編「保育所保育指針解説」フレーベル館 pp.346-347、2018
- 6) 狩野奈緒子「新型コロナウイルス感染症拡大下における親子遊び場の意義を再考する—短期大学子育て支援広場参画の保護者視点を通して—」桜の聖母短期大学紀要第46号 pp.33-45、2022

参考文献

- ・辻ゆき子、宮里慶子、岸本みさ子、串崎幸代「子育て支援活動における学生の学び—金蘭おやこクラブの活動内容におけるねらいと課題—」千里金蘭大学紀要第14号 pp.63-72、2017
- ・小原敏郎、安部久美「保育者養成校における学生の保育・子育て支援活動の社会的スキル、子育て支援力・保育観の検討」共立女子大学家政学部紀要第64号 pp.109-121、2018
- ・小原敏郎「保育者養成校が行う保育・子育て支援に参加する学生の主体的・対話的学びに関する研究：ICTを活用した記録に焦点を当てて」共立女子大学家政学部紀要第68号 pp.65-72、2022
- ・鬘櫛久美子『「成長し続ける保育者」を養成するプログラム（1）—理論編—』名古屋柳城女子大学研究紀要創刊号 pp.47-62、2020
- ・鬘櫛久美子・野田さとみ『「成長し続ける保育者」を養成するプログラム（3）—「子ども学フィールドワークⅠ」の教育方法—』名古屋柳城女子大学研究紀要第2号 pp.79-90、2021
- ・野田さとみ・鬘櫛久美子『「成長し続ける保育者」を養成するプログラム（4）—「子ども学フィールドワークⅠ」の授業実践から見えた課題—』名古屋柳城女子大学研究紀要第2号 pp.91-100、2021
- ・今井和子・近藤幹生監修、小野崎佳代ら編著「MINERVA 保育士等キャリアアップ研修テキスト6 保護者支援・子育て支援」ミネルヴァ書房、2020
- ・園川緑・中蔦洋編著「保育者のための子育て支援入門 ソーシャルワークの視点からやさしく学ぶ」萌文書林、2021
- ・子育て支援者コンピテンシー研究会編著「育つ・つながる子育て支援 具体的な技術・態度を身につける32のリスト」チャイルド本社、2009
- ・長谷中崇志「保育者養成課程における地域を基盤としたソーシャルワーク実践教育プログラムの開発に向けた研究—地域との協働によるサービスラーニング型子育て支援活動の10年間の振り返り

「振り返り」名古屋柳城短期大学研究紀要大 39号 pp.143-164、2017

- Murata, Yasuto “Practical Learning in “Reading Picture Books Aloud Sessions”: A Program to Learn the Area “Language” in the Content of ECEC” (「おはなし会」における絵本を用いた実践的な学習—保育内容「言葉」の指導法に関する演習での取り組み) 柳城こども学研究第4号 pp. 19-34、2021

資料2

活動日	4月19日(火)	学籍番号	■■■■■■■■■■	氏名	■■■■■■■■■■
担当コナー	あ 祖大な巻物	コナー(父)	■■■■■■■■■■	コナー(母)	■■■■■■■■■■
(Oを付ける)	い 親子のふれあい遊び う 劇的な動き(音・色・形など) え 劇的な動き(絵本・模型・言葉など) お コナー(母)	フリースペース	■■■■■■■■■■	フリースペース	■■■■■■■■■■
今週の自分の役割	リ・カー (人数確認)	コナー(母)	■■■■■■■■■■	コナー(母)	■■■■■■■■■■
個人	Plan	Do	Check	Action	その他
<p>「おはなし会」は、絵本を朗読し、親子で楽しむ活動です。絵本を通じて、親子のふれあいを深め、親子の絆を強めます。</p> <p>絵本の読み聞かせは、親子のふれあいを深め、親子の絆を強めます。絵本を通じて、親子のふれあいを深め、親子の絆を強めます。</p>	<p>絵本を朗読し、親子で楽しむ活動です。絵本を通じて、親子のふれあいを深め、親子の絆を強めます。</p> <p>絵本の読み聞かせは、親子のふれあいを深め、親子の絆を強めます。絵本を通じて、親子のふれあいを深め、親子の絆を強めます。</p>				

資料1

時間	9:00 ~ 10:00
①準備	<ul style="list-style-type: none"> ・体育館集合、挨拶(5分) ・体育館清掃(5分) ・体育館準備(5分) ※お楽しみ、モップ
②活動	<p>「おはなし会」は、絵本を朗読し、親子で楽しむ活動です。絵本を通じて、親子のふれあいを深め、親子の絆を強めます。</p> <p>絵本の読み聞かせは、親子のふれあいを深め、親子の絆を強めます。絵本を通じて、親子のふれあいを深め、親子の絆を強めます。</p>
③片付け	<ul style="list-style-type: none"> ・体育館清掃(5分) ・体育館準備(5分) ・体育館集合、挨拶(5分)
④お楽しみ	<ul style="list-style-type: none"> ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分)
⑤片付け	<ul style="list-style-type: none"> ・体育館清掃(5分) ・体育館準備(5分) ・体育館集合、挨拶(5分)
⑥お楽しみ	<ul style="list-style-type: none"> ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分)
⑦片付け	<ul style="list-style-type: none"> ・体育館清掃(5分) ・体育館準備(5分) ・体育館集合、挨拶(5分)
⑧お楽しみ	<ul style="list-style-type: none"> ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分)
⑨片付け	<ul style="list-style-type: none"> ・体育館清掃(5分) ・体育館準備(5分) ・体育館集合、挨拶(5分)
⑩お楽しみ	<ul style="list-style-type: none"> ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分)
⑪片付け	<ul style="list-style-type: none"> ・体育館清掃(5分) ・体育館準備(5分) ・体育館集合、挨拶(5分)
⑫お楽しみ	<ul style="list-style-type: none"> ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分)
⑬片付け	<ul style="list-style-type: none"> ・体育館清掃(5分) ・体育館準備(5分) ・体育館集合、挨拶(5分)
⑭お楽しみ	<ul style="list-style-type: none"> ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分)
⑮片付け	<ul style="list-style-type: none"> ・体育館清掃(5分) ・体育館準備(5分) ・体育館集合、挨拶(5分)
⑯お楽しみ	<ul style="list-style-type: none"> ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分)
⑰片付け	<ul style="list-style-type: none"> ・体育館清掃(5分) ・体育館準備(5分) ・体育館集合、挨拶(5分)
⑱お楽しみ	<ul style="list-style-type: none"> ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分)
⑲片付け	<ul style="list-style-type: none"> ・体育館清掃(5分) ・体育館準備(5分) ・体育館集合、挨拶(5分)
⑳お楽しみ	<ul style="list-style-type: none"> ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分)
㉑片付け	<ul style="list-style-type: none"> ・体育館清掃(5分) ・体育館準備(5分) ・体育館集合、挨拶(5分)
㉒お楽しみ	<ul style="list-style-type: none"> ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分)
㉓片付け	<ul style="list-style-type: none"> ・体育館清掃(5分) ・体育館準備(5分) ・体育館集合、挨拶(5分)
㉔お楽しみ	<ul style="list-style-type: none"> ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分)
㉕片付け	<ul style="list-style-type: none"> ・体育館清掃(5分) ・体育館準備(5分) ・体育館集合、挨拶(5分)
㉖お楽しみ	<ul style="list-style-type: none"> ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分)
㉗片付け	<ul style="list-style-type: none"> ・体育館清掃(5分) ・体育館準備(5分) ・体育館集合、挨拶(5分)
㉘お楽しみ	<ul style="list-style-type: none"> ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分)
㉙片付け	<ul style="list-style-type: none"> ・体育館清掃(5分) ・体育館準備(5分) ・体育館集合、挨拶(5分)
㉚お楽しみ	<ul style="list-style-type: none"> ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分)
㉛片付け	<ul style="list-style-type: none"> ・体育館清掃(5分) ・体育館準備(5分) ・体育館集合、挨拶(5分)
㉜お楽しみ	<ul style="list-style-type: none"> ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分)
㉝片付け	<ul style="list-style-type: none"> ・体育館清掃(5分) ・体育館準備(5分) ・体育館集合、挨拶(5分)
㉞お楽しみ	<ul style="list-style-type: none"> ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分)
㉟片付け	<ul style="list-style-type: none"> ・体育館清掃(5分) ・体育館準備(5分) ・体育館集合、挨拶(5分)
㊱お楽しみ	<ul style="list-style-type: none"> ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分)
㊲片付け	<ul style="list-style-type: none"> ・体育館清掃(5分) ・体育館準備(5分) ・体育館集合、挨拶(5分)
㊳お楽しみ	<ul style="list-style-type: none"> ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分)
㊴片付け	<ul style="list-style-type: none"> ・体育館清掃(5分) ・体育館準備(5分) ・体育館集合、挨拶(5分)
㊵お楽しみ	<ul style="list-style-type: none"> ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分)
㊶片付け	<ul style="list-style-type: none"> ・体育館清掃(5分) ・体育館準備(5分) ・体育館集合、挨拶(5分)
㊷お楽しみ	<ul style="list-style-type: none"> ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分)
㊸片付け	<ul style="list-style-type: none"> ・体育館清掃(5分) ・体育館準備(5分) ・体育館集合、挨拶(5分)
㊹お楽しみ	<ul style="list-style-type: none"> ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分)
㊺片付け	<ul style="list-style-type: none"> ・体育館清掃(5分) ・体育館準備(5分) ・体育館集合、挨拶(5分)
㊻お楽しみ	<ul style="list-style-type: none"> ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分)
㊼片付け	<ul style="list-style-type: none"> ・体育館清掃(5分) ・体育館準備(5分) ・体育館集合、挨拶(5分)
㊽お楽しみ	<ul style="list-style-type: none"> ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分)
㊾片付け	<ul style="list-style-type: none"> ・体育館清掃(5分) ・体育館準備(5分) ・体育館集合、挨拶(5分)
㊿お楽しみ	<ul style="list-style-type: none"> ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分) ・お楽しみ(5分)

Student-Oriented “Child Rearing Support Activities” (1): Significance of Experiential Learning Through Practice

Kikuchi, Atsuko* Toyoda, Akiko* Ogiwara, Harumi* Murata, Yasuto* Toyoda, Kazuko*

本研究は、保育者養成校で学生が主体となって運営・実施する子育て支援活動を通し、学生の子育て支援に関する理解の深化がどのように図られたかを検証するとともに、独自にカリキュラム化された「子育て支援活動」の教育的意義や課題を明らかにした。この活動は「子ども学フィールドワークⅢ」の前期授業計画に基づき、計4回の実践を軸に準備、実践、省察、改善を繰り返した。教員が全体の大まかな枠組みを示し、学生はグループに分かれ役割分担をして取り組んだ。反省的思考の習慣が身につく、PDCA活動を有効に行うことができた学生による省察レポートを整理・分析した結果、次のことがわかった。

学生は、回数を重ねたことで一定の達成感を得たが、子育て支援活動の運営に関してコミュニケーション力やチームワーク力など保育の協働性についてや、自らの保育技能や知識の向上についてなど様々な課題意識を持った。これは、1年次からの履修科目全体を振り返ることで明確に持ち得た意識でもあった。一方、本学の子育て支援活動の質は担保されたものの、授業展開において事前学習の内容、実践回数、省察の時期及び方法などを再検討し、よりブラッシュアップさせる必要があることがわかった。また参加者の支援ニーズの把握についても示唆された。

今後も引き続き、「カリキュラム化された学生主体の地域に根差す子育て支援活動」の意義と課題と探求したい。

キーワード：子育て支援活動, 学生主体, カリキュラム化, 実践, 反省的思考の習慣

執筆分担

- I 1.4 菊地篤子
- 2 豊田明子・村田康常
- 3 萩原はるみ
- II 菊地篤子
- III 1.3 菊地篤子
- 2 豊田明子
- IV 菊地篤子
- V 菊地篤子・豊田和子（一部）

